



中国がわかるシリーズ 24 武韋の禍の実態（下）

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

この女性優位の約半世紀を、一般には、武韋の禍と呼んでいます。武后は、怪僧や若い男性を鍾愛して後世の批難を受けましたが、皇帝の後宮に比べれば、実にささやかなものです。一体、何が、禍であったのでしょうか。確かに、唐王室の男性（や後世の儒家）にとっては、災いであったかも知れませんが、この時代に、南北朝以来の貴族層は淘汰され（武川 6 鎮以来の軍閥も姿を消しました）、全国から集まった俊秀が政府の中枢部を掌握するようになったのです。社会の風通しは、格段によくなりました。

唐の絶頂期、玄宗の開元の治を担ったのは、武則天が登用した姚崇や宋璟などの少壮官僚達でした。歴史を客観的に見れば、太宗と武則天の 2 人が唐の基盤を磐石にしたと言っても決して過言ではありません。その上に、大唐世界帝国が絢爛豪華な花を咲かせたのです。武則天は、隋の文帝同様、仏教を保護して、全国に大雲（経）寺を建立しました（これが、わが国の国分寺に繋がります）。武則天が力を注いだ洛陽郊外、龍門石窟の毘盧遮那仏（華嚴宗の教主。時空を超えた絶対仏で国家鎮護のシンボル）の穏やかな表情は、民衆に大変人気のあった武則天を写したものと云われています。それから、約 80 年後（752 年）、奈良の東大寺で、インドの僧、菩提僊那により毘盧遮那仏の開眼供養が行われましたが、その主催者は、考謙女帝でした。武則天がロールモデルを提供した東アジアの女性の時代の大きな流れは、間違いなくわが国にも及んでいたのです。